

製品名: PKC ζ (リン酸化 Thr410) ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab05264**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	ヒト、マウス、ラット
標識	非共役
修飾	リン酸化
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:200-1:1000,ELISA 1:10000-1:20000
分子量	70kDa

抗原情報

遺伝子名	PRKCZ
別名	PRKCZ; PKC2; Protein kinase C zeta type; nPKC-zeta
遺伝子 ID	5590.0
SwissProt ID	Q05513
免疫原	抗血清は、Thr410 のリン酸化部位周辺のヒト PKC ゼータ由来の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 376-425

背景

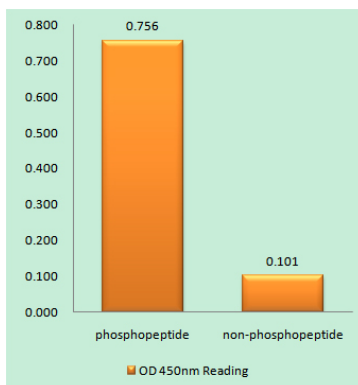
プロテインキナーゼ C (PKC) ゼータは、増殖、分化、分泌など、様々な細胞プロセスに関与するセリン / スレオニンキナーゼの PKC

ファミリーの一員です。カルシウム依存性の古典的な PKC アイソザイムとは異なり、PKC ゼータはカルシウムとジアシルグリセロールに依存しないキナーゼ活性を示し、ホスファチジルセリンには依存しません。さらに、PKC ゼータは一般的な PKC 阻害剤に非感受性であり、ホルボールエステルによって活性化されません。古典的な PKC アイソザイムとは異なり、PKC ゼータはジンクフィンガームジュールを1つしか有しません。これらの構造のおよび生化学的特性から、ゼータ亜種は PKC の他のアイソザイムと関連はあるものの、異なる性質を持つことが示唆されます。選択的スプライシングにより、異なるアイソフォームをコードする複数の転写産物バリエーションが生成されます。[RefSeq 提供、2008 年 7 月],触媒活性: ATP + タンパク質 = ADP + リン酸化タンパク質。 ,ドメイン: C1 ドメインはジアシルグリセロール (DAG) に結合しません。 ,ドメイン: OPR ドメインは、SQSTM1 および PARD6B と相互排他的な相互作用を媒介します。 ,酵素調節: ホスファチジルイノシトール 3,4,5-トリリン酸は生理的活性化因子である可能性があります。完全に活性化するには、Thr-410 (キナーゼドメインの活性化ループ) と Thr-560 (ターンモチーフ) の2つの特定の部位がリン酸化される必要があります。 ,機能: PKC はジアシルグリセロールによって活性化され、ジアシルグリセロールは様々な細胞タンパク質をリン酸化します。PKC は、腫瘍プロモーターの一種であるホルボールエステルの受容体としても機能します。上皮細胞の分極において中心的な役割を果たす四元複合体のサブユニット。 ,機能:カルシウム非依存性、リン脂質依存性、セリンおよびスレオニン特異的酵素。 ,類似性:プロテインキナーゼスーパーファミリーに属します。 ,類似性:プロテインキナーゼスーパーファミリーに属します。 AGC Ser/Thr プロテインキナーゼファミリー。 PKC サブファミリー。 ,類似性:AGC キナーゼ C 末端ドメインを1つ含みます。 ,類似性:OPR ドメインを1つ含みます。 ,類似性:ホルボールエステル/DAG 型ジンクフィンガームジュールを1つ含みます。 ,類似性:プロテインキナーゼドメインを1つ含みます。 ,細胞内局在:網膜において、桿体双極細胞の末端に局在します(類似性による)。エンドソームと会合します。 ,サブユニット:SQSTM1 および KCNAB2 と三元複合体を形成します。 SQSTM1 および GABRR3 と別の三元複合体を形成する。 SQSTM1 および MAP2K5 と複合体を形成する(類似性による)。 PARD6A、PARD6B、PARD6G、および SQSTM1 と相互作用する。 PARD3、PARD6A、PARD6B、PARD6G、および CDC42 または RAC1 と複合体を形成する。 ADAP1/CENTA1 と相互作用する。 SQSTM1 および PAWR からなる三元複合体を形成する。 SQSTM1 と直接相互作用する(可能性が高い)。 IKBKB と相互作用する。 ,組織特異性:脳で発現し、肺、腎臓、精巣でも発現が弱い。 ,

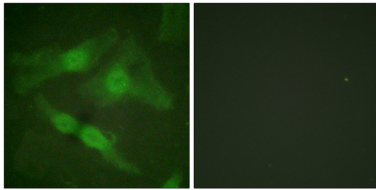
研究分野

微小管制御; アクチンダイナミクスの制御; 幹細胞経路; インスリン受容体; PI3K/Akt; B 細胞受容体; AMPK

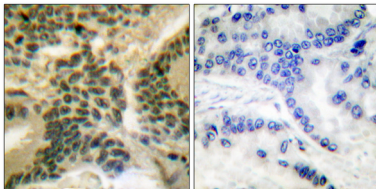
画像データ



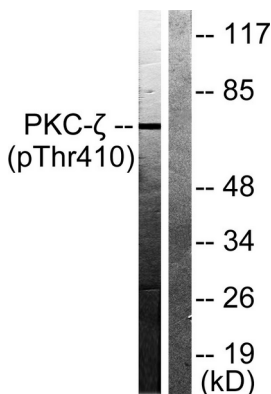
PKC ゼータ (リン酸化 Thr410) 抗体を用いたリン酸化ペプチド (リン酸化左) および非リン酸化ペプチド (リン酸化右) 免疫原の酵素結合免疫吸着測定法 (リン酸化 ELISA)



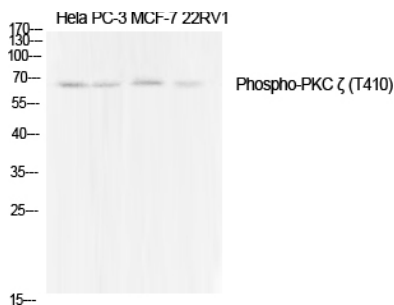
PKC ゼータ (リン酸化 Thr410) 抗体を用いた HeLa 細胞の免疫蛍光染色。右の写真はリン酸化ペプチドでブロッキングした状態。



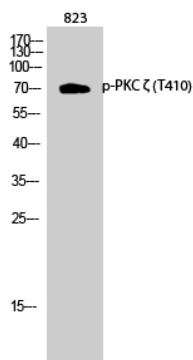
PKC ゼータ (リン酸化 Thr410) 抗体を用いたパラフィン包埋ヒト肺癌の免疫組織化学染色。右の写真はリン酸化ペプチドでブロッキングした状態。



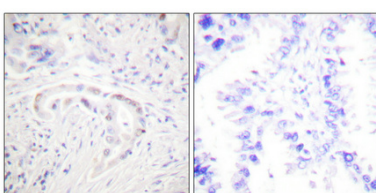
PMA 125 ng/ml 30 分処理した NIH/3T3 細胞のライセートを PKC ゼータ (リン酸化 Thr410) 抗体を用いてウェスタンブロット解析した。右レーンはリン酸化ペプチドでブロッキングされている。



リン酸化 PKCζ (T410) ポリクローナル抗体を 1: 1000 に希釈して、様々な細胞をウェスタンブロット解析した。



1: 1000 希釈の Phospho-PKC ζ (T410) ポリクローナル抗体を用いた 823 細胞のウェスタンブロット解析



パラフィン包埋ヒト肺癌の免疫組織化学染色。抗体は 1:100 (4°C、一晚) に希釈した。抗原賦活化には、高圧高温トリス EDTA (pH8.0) を使用した。抗体から得られたネガティブコントロール (右) は、免疫原ペプチドで前処理した。

